日本歯科医史学会々誌・第19巻
第3号通巻72号・平成5年5月

解体新書の絵師—小田野直武*

中　原　　泉**

要　旨

「解体新書」に関してはすでに語り尽されているが，同書の図譜を画いた絵師小田野直武については，医学史上あまり知られていない．

そこで，小田野直武の生涯と業績を解説し，ターヘル・アナトミアの模写に関わる経緯と彼の心情を記した．

（キーワーズ **Key words**）

小田野直武，解体新書，秋田蘭画，ターヘル・アナトミア

14冊の西洋医書

「解体新書」に関しては，わが国に近代医学を導入した医書だけに，すでに語り尽されている．残された研究課題は，序図の扉絵と手足剖出図はいずれの西洋医書を模写したのか，という2点に過ぎない．

解体新書の凡例には，杉田玄白ら翻訳グループが臨写（模写）・引用した西洋医書として，J.A. Kulmus の原著のほかに12冊を掲げている．しかし，扉絵と手足剖出図の元絵の出典は，明らかにされていない．そのため，かねて解体新書をめぐるナゾとされてきた．

筆者は先に，扉絵は C. Plantini 編纂による Valverde 解剖書を敷写（透写）したものであることを立証した[1]．また，手足剖出図の4葉は，G. Bidloo 解剖書か，W. Cowper 解剖書の模写であるか特定できないことを確認した[2]．

つまり，玄白らは翻訳当時，14冊の西洋医書を持っていたことになる．安永年間，長崎出島というピンホールから入手した貴重な西洋医書である．凡例に掲げられた12冊は，いずれも16世紀後半のヨーロッパの医書で，解体新書上梓より100～200年前に出版された．あとの2冊は，17世紀末期から18世紀前半の40～90年前になる．

さて，ナゾとされたこの扉絵と手足剖出図をふくめて図譜を画いたのは，小田野直武（1749～1780）である（図1）．

絵師小田野直武

小田野直武は，寛延2年12月11日秋田の角館裏町に，小田野直賢の第四子として生まれた．幼少から絵筆に親しみ，9歳頃には「釈迦涅槃像図」や「摩利支天像図」を巧みに画いたという（図2）．

宝暦8年9月10歳で秋田藩に出仕し，かたわら絵の修業をつづけ，12歳で狩野派風の「神農像図」，17歳で「大威徳明王像図」などを画く．この頃に，藩絵師の武田円碩に師事して狩野派を学ぶ．18歳のとき，前期の代表作とされる肉筆浮世絵「花下美人図」を残す．20歳で「獅子図」，24歳で「菊花図」，その他「立美人図」，「鷹図」，「柘榴図」等，狩野派，浮世絵，南蘋派など，その画風は定まっていない．

模索をつづける直武に，大きな転機が訪れる．秋田藩主の佐竹義敦（曙山）は20万5千石の藩財

---

* Naotake Odano, The painter of Kaitai-Shinsho

** Sen NAKAHARA, The Museum of Medicine, The Nippon Dental University at Niigata 医の博物館・日本歯科大学新潟歯学部

本論文の要旨は，日本歯科医史学会第226回例会（1993年1月・東京のモリタホール）において口演した．

図 1 秋田でだされた郷土の歴史人物シリーズ⑥のオレンジカード
ただし，小田野直武の肖像は全くの想像画である．

政の立直しを図って，阿仁銅山の検分に江戸から万能の才人平賀源内を招聘した．安永2年10月，その往途角館に立寄った源内は，偶然，直武の画いた屏風絵をみる．天賦の才を見抜いた源内は，直武に上からみた大小の鏡餅を画かせたという．直武の修めた邦画法では立体感と即物感を画けず，源内は彼に洋画の陰影法と遠近法を教えた．直武は，洋画の写実法に啓発され発奮する．

11月20日，彼は銅山方産物吟味役として江戸詰となる．この転任は，源内の進言により義敦が指図したことであろう．12月1日江戸に登り，直武はただちに源内に師事する．そして彼を通じて，杉田玄白ら江戸蘭学者，司馬江漢ら蘭癖絵師たちと交流をもつようになる．

ターヘル・アナトミア

折しも，J.A. Kulmus の蘭訳版「Ontleedkundige Tafelen」，通称「ターヘル・アナトミア」を翻訳中だった杉田玄白らは，図譜を模写する絵師を捜していた．源内の推薦をうけて，玄白は直武に執筆を依頼する．いわば白羽の矢をたてられた直武であったが，彼は“紅毛の画”と逡巡する．結局，

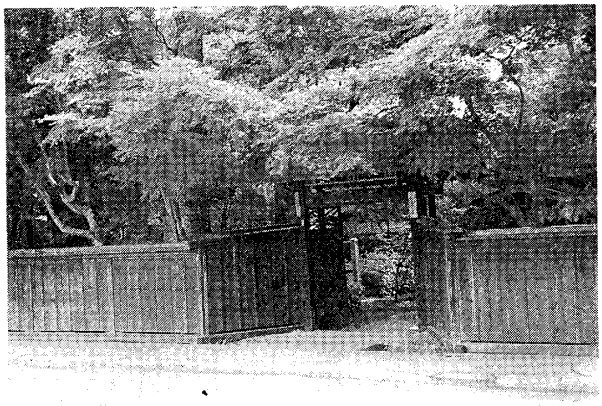

図 2 武家屋敷のならぶ角館の一角にある小田野家の屋敷構え

我友人杉田玄白所譯之解體新書成共令予寫之圖焉
夫紅毛之画也至矣哉如余不佞者非敢所企及雖然又云不可
圖絵及明文嗚呼與買怨于同袍寧流矣於千載邪四方君
子幸恕之
東羽秋田藩小田野直武

図 3 解体新書の序図の小田野直武の跋文

玄白の懇望に負けて渋々筆をとる．直武26歳のときである．

彼は，原著の図譜を面相筆で丹念に模写した．一部は，ほかの5冊の西洋医書からも模写した．彼が執筆をはじめたのは，おそらく上京の翌年の初めである．32頁にわたる大小の図を画くのに，少なくとも半年間は要したことだろう．この頃には翻訳は終わっており，あとは図譜の木刻を待つ

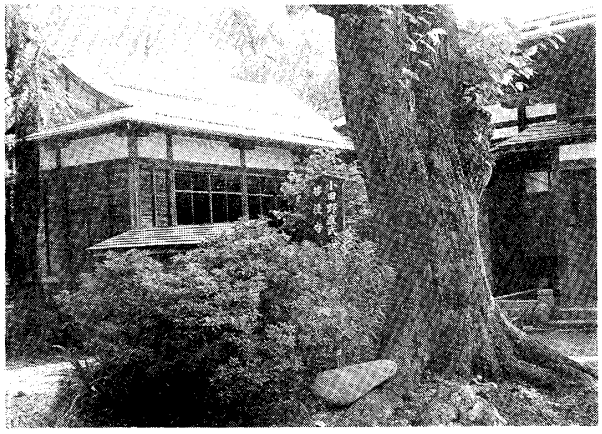

図 4　小田野直武の菩提寺の松庵寺

図 5　松庵寺の小田野直武の墓（中央）
壊れた墓石を接ぎあわせたので，戒名の下半分が欠けている．

図 6　松庵寺の境内にある小田野直武の碑
昭和11年５月，角館町の有志により建立された．

図 7　小田野直武碑

ばかりであったと思われる．写された絵から，次次に木版に刻まれていった筈である．

前年に予告版として「解体約図」を刊行するなど，玄白は翻訳の先陣を切ろうと焦慮に駈られていた．直武は上梓を急ぐ彼に，さぞ急かされたことだろう．

直武は上梓された序図の跋文に，次のように記している[3]（図３）．

「我が友人杉田玄白訳する所の解体新書成る．予をしてこれが図を写さしむ．それ紅毛の画や至れるかな．余の如き不倭は，敢て企て及ぶ所に非ず．然りと雖もまた図くべからずと云わば，怨み朋友に及ばん．ああ，怨みを同袍に買わんよりは，寧ろ臭を千戴に流さんや．四方の君子，幸いにこれを恕せよ．」「我が友人である杉田玄白の訳した解体新書が，完成しました．私が図の模写を行いました．この紅毛の画が，的を得ているでしょうか．私のような才知のない人間が，本来このような企てに加わるものではありません．しかしそうは言っても，模写を担当しないと言うと，怨みは友に及んでしまいます．ああ，怨みを友に買うよりは，むしろ悪名を長い歳月に流した方がよ

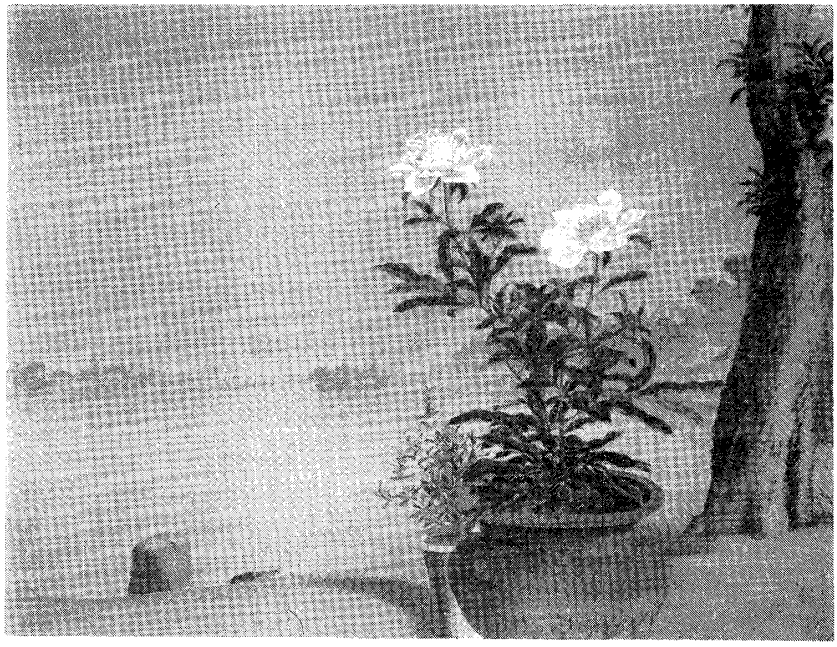

図 8　小田野直武の代表作「不忍池図」

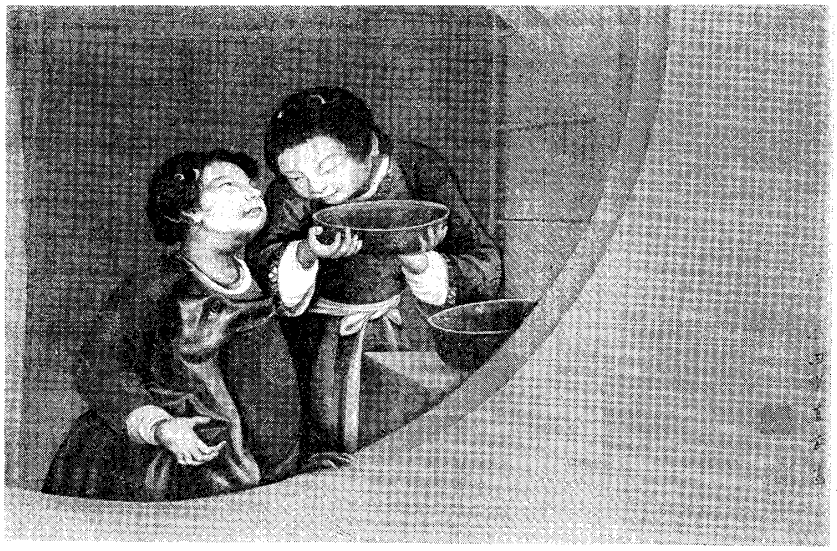

図 9　小田野直武の代表作「児童愛犬図」

いでしょう．四方の君子たちよ．どうか，この事を思いやってもらえれば幸いです．」

上京したての田舎絵師直武は，この頼まれ仕事が蘭学を拓く大業であることを，どの程度認識していたか分らない．文面にはとにかく気の進まぬ仕事をやらされたというボヤキがあふれ，芸術家らしい屈折した心情を覗かせている．

ともあれ，解体新書は，その年の仲秋（現在の9月）に上梓された．それから3年余，直武は江戸で画業に専心し，東洋画に洋画の写実精神と油彩描法を混交し融合させた独自の画風を開拓していく．

秋田蘭画

安永6年12月24日，直武は4年ぶりに帰藩する．翌年4月に御小姓並として秋田の本城詰に抜擢され，曙山らに洋画法の手ほどきをし，雅趣を好む藩主の寵を得る．直武から伝授された曙山は

西洋画に傾倒し，9月には，わが国最初の西洋画論となる「画法綱領」，「画図理解」を著わす．

鎖国下にあった当時，いち早く洋風画に着目した先見性，困難を排して洋画法を吸収した進取の気性，それはパイオニアに共通する資質であろう．

直武は7年9月に藩主の御側小姓格となり，10月2日曙山の参勤に随従してふたたび江戸に登った．この2度目の江戸滞在中，彼は自らの画業を磨き，後期の代表作といわれる「不忍池図」，「富嶽図」ら，陰影法を用いた写実的な花鳥画や遠近法を用いた風景画など，和洋折衷のアンバランスな雰囲気をかもしだす斬新な作品を画く．

曙山もまたこの時期，直武と競いあうように旺盛な筆力で次々に優品を描いた．洋風表現による日本風景画をはじめ，彼らの和洋折衷の独自の画風は，秋田系洋風画として光彩を放つ．

安永8年は，2人にとってもっとも充溢した時期であったろう．だが，この絵画を通した君主と家臣の不釣合いな密月時代は，1年とつづかなかった．その年の11月23日，直武は藩主の勘気をこうむり，緩怠之勤方に付き遠慮仰せ付けられ，角館に蟄居する．

直武が分を弁えず，藩政または藩主の行状に直諫したと言い伝えられるが，画業につき両者に意見の相違があったため，直武自身の行状が芳しからざるため，また源内事件に連座したためという諸説もある．いずれにせよ，絵事を通して藩主の寵を得る直武が，家臣の反感と妬みを買ったことは確かだろう．

失意のうちに直武は，労咳（肺結核）であろう，幾度か喀血して次第に衰弱していく．翌9年5月17日，直武はにわかに喀血し，32歳で角館に没する．死の前日に赦免されるが，御赦免状が届いたのは死の翌日であったという．遺体は，角館の松庵寺に葬られた．戒名「絶学源真信士」（図4，5）．

曙山は彼の死を惜しみ，一時絵筆を絶つ．5年後の天明5年，彼も36歳で江戸藩邸にて病没する．

長崎，京坂，江戸などに先発して，奥羽の片隅ににわかに開花した秋田系洋風画，のちに“秋田蘭画”と称される流派は，支柱である2人の傑出した人物を相次いで失って，僅か12年足らずで衰退し，やがて消滅する（図6，7）．

今に残る直武の作品としては，「鷺図」，「笹に白兎図」，「秋菊図」，「芍薬花籠図」，「牡丹図」，「岩に牡丹図」，「蓮花図」，「唐太宗・花鳥山水図」，「児童愛犬図」，「風景図」，「日本風景図」，「不忍之池図」，「江ノ島図」，「梅屋敷図」，「富嶽図」2点，「品海帰帆図」，「百合図」，「雷魚図」，「鱒図」，「松に鷹図」，「洋人調教図」，「不忍池図」，写生帖1帖などがある．

洋画法を採り入れた以降の代表作としては，「不忍池図」（重要文化財）をはじめ，「富嶽図」，「鷹図」，「蓮花図」，「笹に白兎図」，「芍薬花籠図」，「鷺図」，「唐太宗・花鳥山水図」，「児童愛犬図」などが挙げられる（図8，9）．

引用文献

1) 中原　泉：立証！解体新書の扉の元絵．歯医史 19(2)：62–70，1993.
2) 中原　泉：解体新書の手足剖出図異聞．歯医史 19(3)：89–94，1993.
3) 杉田玄白，ほか：解体新書，東武書林，1774.
4) 小田野直武顕彰会：小田野直武，小田野直武顕彰会，1936.

参考文献

1) 秋田県史文芸教学編，秋田県，1961.
2) 小川鼎三：解体新書―蘭学をおこした人々，中央公論社，1968.
3) 瀬木慎一：謎の近世画家，㈱ジャパン・パブリッシャーズ，1977.
4) 鷲尾　厚：解体新書と小田野直武，翠楊社，1980.
5) 井上隆明：新訂版秋田書画人伝，加賀谷書店，1981.
6) 秋田蘭画展・江戸洋画のナビゲーター，秋田市立千秋美術館，1990.

表 1　小田野直武年譜

１７４９年	寛延　２年	０歳	１２月１１日秋田の角館に生まれる。
１７５７年	宝暦　７年	９歳	「釈迦涅槃像図」や「摩利支天像図」等を画く。
１７５８年	宝暦　８年	１０歳	９月秋田藩に出仕する。
１７６０年	宝暦１０年	１２歳	狩野派風の「神農像図」を画く。
１７６５年	明和　２年	１７歳	「大威徳明王像図」を画く。この頃、藩絵師の武田円碩に師事して狩野派を学ぶ。
１７６６年	明和　３年	１８歳	前期の代表作「花下美人図」を画く。
１７６８年	明和　５年	２０歳	「獅子図」を画く。
１７７２年	明和　９年	２４歳	「菊花図」を画く。その他、この頃までに「立美人図」「鷹図」「柘榴図」等を画く。
１７７３年	安永　２年	２５歳	１０月角館で平賀源内に啓発され、洋画法を教わる。 １１月２０日、銅山方産物吟味役として江戸詰となる。 １２月１日江戸に登り、ただちに源内に師事する。
１７７４年	安永　３年	２６歳	杉田玄白らに依頼されて、「ターヘル・アナトミア」等の図譜を模写する。 それから３年余、画業に専心し、独自の画風を開拓する。
１７７７年	安永　６年	２９歳	１２月２４日４年ぶりに帰藩する。
１７７８年	安永　７年	３０歳	４月御小姓並として秋田の本城詰となり、藩主佐竹曙山らに洋画法を手ほどきする。 ９月御側小姓格となり、藩主の寵を得る。 １０月２日藩主の参勤に随従して、ふたたび江戸に登る。 それから１年余、画業を磨き、後期の代表作「不忍池図」等を画く。
１７７９年	安永　８年	３１歳	１１月２３日藩主より遠慮仰せ付けられ、角館に蟄居する。
１７８０年	安永　９年	３２歳	５月１７日角館で病没する。同地の松庵寺に葬られる。戒名「絶学源真信士」